

## 徐霞客遊記の基礎的研究 (六)

—事類篇・洞 (その4)、全行程 (その5)、  
埼玉大学図書館蔵「徐霞客」関連文献目録稿 (1)—

薄 井 俊 二 埼玉大学教育学部言語文化専修国語分野

キーワード：徐霞客、徐弘祖、洞、雲南、文献目録

### 1. はじめに

本稿は、明末の地理家である徐霞客の「遊記」について、基礎的な検討を加えるもので、次の三部構成からなる。第1部は、「事類篇・洞 (その4)」として、「洞穴」に関する遊記の記述を、「黔遊日記」と「滇遊日記」一・二について検討する。第2部は、「全行程 (その5)」として、「滇遊日記」一・二の行程について詳述する。第3部は、「埼玉大学図書館蔵『徐霞客』関連文献目録稿 (1)」として、埼玉大学図書館が所蔵する「徐霞客」に関連する文献について、その目録を記す。

### 2. 第1部 徐霞客遊記の洞穴記述 (その4): 「黔遊日記」「滇遊日記 (一) (二)」

#### 2-1. 黔遊日記一

遊記の巻四上は、「黔遊日記一」と「黔遊日記二」。「黔遊日記一」は、貴州における崇禎11年(1638)3月27日から、4月24日までの記録である。

##### 2-1-1. 洞穴の記述

①由彝村南石壁の洞 都匀府豊寧長官司：1638年3月27日

・東向きで、細流が流入し、西に貫通しているのを観察。「固知大脊猶在東也。」入洞していないが「1」。

②上司域すぐの洞 同前：3月28日

・道の北の峯の崖の半ば。西向き。「1」と数える。

③上司鎮の洞 同前：3月28日

・鎮の北半里に、圉（堡壘式の住居）があり、そこに洞。灯火を借りて入洞。  
・北向き、下は泥土で、上から水滴。足の踏み場も無く、出洞。「1」。

\*桃源洞 都匀府豊寧長官司：4月1日

・麥冲堡の西五里。炬が必要で、中に色々なものがあるらしい。宿の主人に案内を頼むも、断られる。数えない。

\*観音洞 都匀府豊寧長官司：4月1日

- ・麥冲堡の近くの麥冲関の東に真武閣があり、観音洞と対す。
- ・僧侶に炬を求めたが、川の水が漲っていて渡れず、入洞を断念。数えない。

④九龍洞 都匀府豊寧長官司：4月1日

- ・城東十里。「大明一統志」の「都匀洞」がこれか。「1」。
- ・「一統志」には「仙人洞が二、一は城東、一は城西」と。よくわからない。

⑤梵音洞 都匀府豊寧長官司：4月1日

- ・城北の夢遇山に水府廟あり。崖に西向きの洞。「1」。
- ・これといった景観ではないが、伝聞では、中の土の中から出てきた石仏があるという。

⑥古仏洞 貴陽府新貴県：4月12日

- ・「遊古仏洞」とのみ。「1」。
- ・新譯によれば、貴陽西北の黔靈山にあり、崖に穿たれており、中に「玉石彫苦行仏座像」あり。

⑦流米洞 貴陽府新貴県：4月15日

- ・白雲山中。白雲寺の裏。「1」。
- ・建文帝が隠れ、小さな穴から米を注いでもらい命を繋いだという伝説。

\* 4月17日：白雲山あたりの水系を記述。水源としての「石洞」「鑼鼓洞」「仙人洞」「金銀洞」「薛家洞」など。洞と水脈との深い関わりを示す。しかし探索の対象ではないので、数えない。

\* 4月18日：北流する河川の水系を記述。水源としての「洞」。数えない。

⑧野鴨塘あたりの「二洞」平霸衛：4月18日

- ・野鴨堡の北の山に、上下の二洞。入洞。「1」と数える。
- ・下洞は、南向き。「門中稍窪」「四面寛円」「不闇」。
- ・上洞は、東向き。前に石が垣根をなす。それほど深くない。中の玲瓏たる景観や鍾乳石は、下洞に及ばない。

⑨江青あたりの三層の洞 平霸衛：4月19日

- ・江青村の東北の山の西面に洞。「1」。
- ・洞頂は甚だ平らで、鍾乳石が垂れ下がる。内部は三層。
- ・外層は、洞門の前にあたり、中に円石あり。下層は、洞門の光が注ぐ。
- ・下層の東にも「洞」があり、「玲瓏嵌空、詭態百出」。中層も。

⑩銅鼓洞 平霸衛：4月19日

- ・平霸衛から五里。銅鼓山中。「1」。
- ・「洞高懸峻裂」。土人が梯子など入る工夫をしている。
- ・老人の薦めで、北洞は棄てて南洞へ。崖に南向きで。

⑪石仏洞 安順府普定衛：4月20日

- ・王家堡の南四里。「1」。
- ・西向きであり深くはなく、甚だ古い九体の石仏あり。

⑫双明洞 鎮寧州安庄衛：4月22日

- ・洞外の双明、洞内の双明がある。「1」。
- ・観音大士の像あり、あるいは金仙像を置く。詳細な描写あり。
- ・新譯によれば、紫雲洞、観音洞の別名あり。

2-1-2. 黔遊日記一のまとめ

黔遊日記一の洞穴は12箇所と数える。黔遊日記と滇遊日記は描写がやや簡略なので、詳しい描写があるのは、⑫双明洞くらいである。おそらくほとんどが鍾乳洞で、鍾乳石の記述があるものもある(③⑧⑨⑫)。仏像などが祭られているものも多く(⑤⑥⑪⑫)、人が出入りしやすい工夫が施されていたものもある(⑩)。信仰の対象や、貯蔵庫として利用されていたものと思われる。水系や水脈との関わりで記述されているものが多い(①、観音洞、白雲山)。

2-2. 黔遊日記二

「黔遊日記二」は、崇禎11年(1638)4月25日から5月9日までの記録である。

2-2-1. 洞穴の記述

①査城(鼎站)附近の洞 安順府永寧州：4月25日

- ・町から西南に一里の路傍に、上下二洞。「1」。
- ・東南向き。上洞は高く登れず。澗がめぐり、下って穴に入る。

②涼水衛附近の洞 安南衛：4月26日

- ・崖の下に「穹然巨洞」。「1」。
- ・北向きで、内は落ち込んで広い。
- ・洞頂より水が散じて落下し、土人はそれを集めて利用している。
- ・右下が最深部で、数百人を容れられるほど。光が及ばず、石が垣根をなしている。

③威山の洞(三明洞?) 安南衛：4月27日

- ・崖に「三明洞」の三文字が彫られている。「3」。

○頂崖の下洞

- ・東向き。上は合掌のようで、窪んで下り、底は四五丈の広さ。
- ・仏龕僧榻があり、僧侶が住んでいるらしい。

○上記に隣接する洞

- ・西向き。門の高さは一丈以下、底は平らで、深さ広さは二丈。
- ・深くはないが「幻」であり、仏座が中にある。
- ・眼前に衛城が見えるが、霧気が一挙に立ちこめて、何も見えなくなる。「山中の蜃気楼」。
- ・洞内は窪みがたくさんあり、水を湛える。

○上記の上の洞

- ・西向き。門が広い。

④芭蕉関手前の洞 同上：4月28日

- ・南向きが二洞あるが、ほとんど隣接しており「1」と数える。
- ・横に広がっていて、頂は平ら。
- ・もうひとつは、西に裂け目。門の中に懸柱（鍾乳石か？）。

⑤芭蕉関西の洞 同上：4月28日

- ・崖の間に。南向き。甚だ深く、入口が見あたらない。よじ登ると、洞口はわずか数尺。「1」。
- ・人が入った痕跡がない。洞口には人か獣かの「満地白骨」。人工の小さい石の大土。

⑥観音洞 同上：4月28日

- ・「弔崖観音」とも。新興城の西。南向き。「1」。
- ・溪水が南から流れ、北向きに洞に入る。
- ・西は開けて層坡があり、東に墜ちて重峡となる。内には懸柱。水は透過して盤江に注ぐ。
- ・門上の崖の端に大土像が穴の中に置いてある。

\* 普安城南の洞 普安州：5月1日

- ・城南門から西を見ると、水が注ぐ洞が見えたが、丹霞山を優先してパス。数えない。

⑦南板橋付近の洞 同上：5月1日

- ・石洞を透過した水が合流。「亦奇」。「1」。

⑧白雲山の洞 同上……「1」。

○小洞：5月1日

- ・南向き。

○山嵐洞：5月2日

- ・白雲寺から眺めただけか？数えない。

⑨碧雲洞天 同上：5月3日

- ・普安城内。洞門は北向きで、三一溪の流れを受ける。「1」。
- ・洞口は広く、宮殿のよう。中はリムストーンプール（十八龍田）、懸龍背など奇景。
- ・最大規模。詳細な描写あり。金仙三像もあり。
- ・新譯及び薄井確認（2017. 11. 25）では、天・地二洞があり、中は通じている。地洞は水があり、入口のみ。

2-2-2. 黔遊日記二のまとめ

黔遊日記二の洞穴は、9箇所と数える。威力の三明洞、新興の観音洞、普安の碧雲洞など、名洞と呼びうる鍾乳洞が多く、黔遊日記一のものよりも、大規模。

### 2-2-3. 黔遊日記全体のまとめ

黔遊日記全体の洞穴は、21箇所と数える。ほとんどが、鍾乳洞で、双明洞・三明洞・観音洞（新興）・碧雲洞など、名洞が多くあり、記述も詳細である。他に、水の出入の記録も多く、いまだ生成過程の鍾乳洞だということであろう。

### 2-3. 滇遊日記一

遊記の巻五上は、「滇遊日記一」と「滇遊日記二」。しかし「滇遊日記一」は、もともと欠けている<sup>(1)</sup>。乾隆本以降、関連する散文をここに宛てることが行われているが、上海新整理本に従い、「遊太華山記」と「遊顔洞記」をここに置き、検討する。

崇禎11年（1638）5月11日から8月6日までが、「滇遊日記一」にあたる。太華山と顔洞への遊がいつ行われたのかは不明。

#### 2-3-1. 洞穴の記述

①太華山の洞 雲南府昆明県：不明……「1」。

- ・「遊太華山記」。滇池に臨む金線泉の北半里。
- ・洞門は東に滇池に向かう。門内は、「石質玲透、裂隙森柱」。
- ・南に向かうと暗くなり、炬が必要。段々広がる。

②顔洞 臨安府建水州：不明……「3」。

○雲津洞

- ・北向き。水洞。「奇」。「雲津洞」三文字が大書。
- ・「中垂列乳柱、繽紛窈窕」。

○萬象洞

- ・東向きで、高さ四丈。水が湧き出す。

○南明洞：記事なし

・新譯：石巖山（蒙山）の山麓に三洞。異龍湖から流れる瀘江が出入。水雲洞（雲津洞、中洞、巖洞）、南明洞、萬象洞。

#### 2-3-2. 滇遊日記一のまとめ

- ・太華山に1箇所、建水の顔洞に3箇所。計4箇所。水が出入。

### 2-4. 滇遊日記二

「滇遊日記二」は、崇禎11年（1638）8月7日から、同29日までの記録。

#### 2-4-1. 洞穴の記述

①瀘源洞 広西府瀘西県：1638年8月11日（8月10日条で概説）

- ・今の阿廬古洞にあたるが、「地名詞典」によれば、阿廬古洞の中に、瀘源洞・玉林洞・碧玉洞・玉笋河があるという。「1」。
- ・三洞からなる。上洞は東南向き、下洞は南向き。後洞がある。
- ・中は深く、炬が必要。中は狭く、伏せて通るところも。「乳柱紛錯」。

・11日の探索では、水が溜まっている上に炬が手に入らず、深くは入れず、中門あたりを探るのみ。

＊通玄洞 同師宗州：同16日条

・師宗城西にあることはつかんでいたが、「不及遊」。数えない。

②金鷄山の洞 曲靖州羅平：同23日

・南峯の下にあり。雨宿りをした。「1」。

## 2-4-2. 滇遊日記二のまとめ

本篇で描かれている地域は、カルスト地形で鍾乳洞も多く形成されている。しかし、洞穴の記述は瀘西県の瀘源洞くらいである。そこも、事前の情報はあったものの、内部深くを探索することはできなかった。計2箇所。

## 3. 第2部 徐霞客遊記全行程（その4）：滇遊日記一・二

### 凡例

- ・「1.行程」で、徐霞客がたどった行程を、遊記をもとに日を追って同定する。
- ・全ての資料で同名の場合は、下線を引く。
- ・一部の資料で同名の場合は、（ ）で資料の略号を記す。
- ・遊記の表記とは異なるが、当該地であろうと推測される地名は〔 〕で示し、資料の略号を記す。
- ・不詳の場合は〔不詳〕と記す。
- ・「墟」「鎮」などの行政単位の異同は、同一と見なす。
- ・「2.経由地」で、徐霞客が経由した府県を確認する。明代の府県名で示し、（ ）で現代（2014年）の地方行政組織名を記す。重複の場合は〈 〉で示し、現代の組織名は略した。
- ・「3.探訪先」で、山岳などの主な探訪対象を記す。（ ）で別称や別表記を示す。
- ・「4.まとまった地理記述」で、ある地域についてまとまった地理記述をしているところを記す。

○「滇遊日記」で参照した地図・書籍とその略称は次の通り。

東亜五十万分一地図（T）<sup>(2)</sup>

朱恵栄主編『中華人民共和国地名詞典 雲南省』商務印書館、1994（詞典）

周峻松等主編『雲南省地図冊』中国地図出版社、2006（①）

星球地図出版社編著『雲南省地図集』星球地図出版社、2017（②）

『貴州省地図冊（中国分省系列地図冊）』中国地図出版社、2013年（貴）

百度地図（BD）…ウェブ上の地図：2018年10月17日確認

黄坤『新譯徐霞客遊記』三民出版社、2002（新訳）

現代地方志（現）<sup>(3)</sup>

### 3-1. 滇遊日記一

「滇遊日記一」は散佚しており、現存しない<sup>(4)</sup>。「黔遊日記二」の最後が、崇禎11年（1638）5月9日で、「滇遊日記二」の最初が、同年8月7日である。「滇遊日記一」は、その間の「5月10日から8月6日」の3ヶ月となる。のちに、「遊太華山記」と「遊顔洞記」という二つの散文をもつ

て、この時期にあてられるようになる。そうであれば、雲南省に入った徐霞客は、先ず雲南府城(昆明)に向かい、太華山を探訪した後に南下。臨安府城に至り、顔洞を探訪。東北へ後戻りをして、「滇遊日記二」が始まる広西府城に至ったのであろう。

### 3-1-1. 行程

崇禎11年丁丑(1638)

5月

10日、陸行。貴州安順府普安州亦資孔駅を出発し、雲南曲靖府域に入る。

(以後詳細な行程は不明)

\*以下日程は不明(「遊顔洞記」)

7日：雲南府治を出て南下、臨安府通海県域に入り、県城を通過。県南の秀山に遊ぶ。上に瀨穹宮あり。南して臨安府建水州域に入り、県城を通過。東して瀘江橋を渡り、更に東して賽公橋を渡り、金雞哨。顔洞探索。老鼠村。(以後不明)

8月

6日、広西府瀘西県城に入る。

### 3-1-2. 経由地(推測)

雲南省曲靖府(雲南省曲靖地級市)

同 雲南府(同 昆明地級市)

同 臨安府(同 紅河哈尼族彝族自治州)

同 広西府(同 )

### 3-1-3. 探訪先

雲南府太華山(今の、昆明市西山)(日時不明)

臨安府顔洞(日時不明)

## 3-2. 滇遊日記二

### 3-2-1. 行程

8月

7日 雲南省広西府瀘西県府城滞在(～16日)。何某に「広西府志」を求める。

10日 周辺の名勝を記述するも、行く手だてがない。

11日 城北の瀘源洞〔詞典①②新譯、現「阿廬古洞」〕を探訪。

14日 城内の玉皇閣を参観。

15日 「広西府志」ようやく手にいる。

16日 府城を出発。陸行。発果山〔不詳〕を越える。平沙哨〔新譯「万曆六年建」、現「白水區善導郷平山哨」〕、矣各橋〔不詳、新譯「又名矣戈河橋」〕、無名の村々を経て、師宗州域に入り、中火鋪〔自注「額勒哨」、現：額則〕、尖山〔不詳〕を経て、師宗州城に泊。

城西に通玄洞・透石靈泉などがあるらしいが行けない。



17日 東へ。緑生橋〔不詳〕を渡り、大河口〔T「小河口」、詞典②現「大同」、①BD「丹鳳鎮」〕、張飛哨〔不詳〕、偏頭哨〔本文「又名新哨」、T「偏山」?〕を経て、峠を越えて曲靖府羅平州域に入る。泥だらけの悪路を行き、彝族の聚落を通る。羅州へ40里のところで立ち往生。營兵に会い、營房を教えてもらう。かなり行きすぎていた。營房に泊。

18日 東へ。悪路を上下し、興哆囉〔T「幸多額」、②「幸多緑」、現「環城鄉幸多禄」BD「幸多禄」〕の北を過ぎ、儼儼の寨、魯彝橋を経て、羅平城に入る。周辺のことを詳述。滞在（～23日）。

19日 「廣西府志」を読む。三人の書生が来訪。

20日～21日 雨。

22日 城内を見学。

23日 出発。東へ。発金徳〔①②現BD「法金甸」?〕、金雞山を経、上下して、彝の寨、没奈徳〔不詳〕、山馬彝〔BD「洒馬邑」?〕、挨沢村〔不詳〕を経て、三板橋〔板橋鎮〕に泊。

24日 東へ、無人の道を上下しながら進み、界頭寨（羅平の漢人集落の東端）〔不詳〕を経て、江底河畔で滇と黔の省界の江底寨〔T「旧・新江底」〕に泊。ここには漢人は一家のみで、他は儼儼。

25日 貴州省安順府普安州域に入る。あるのは、儼儼の集落のみ。水系を記述。柳樹〔貴BD「柳樹坪」〕に泊。ここは漢人の村。

26日 山道を行く。沙澗村〔貴「沙家磴」、新譯「灑金」〕を経て、黄草壩〔興義市城〕に泊。雨続きで、ここに足止め（～29日）。

27日 宿で書きもの。

28日 広西・貴州・雲南の山脈を概述。

29日 雨を冒して出発。山道を行き、豊塘〔T・新譯・現「楓塘」〕を経て、雲南省曲靖府亦佐県域に入り、山中の春家に泊。そこは碧峒〔①BD「上筆冲」、新譯「筆冲」〕。

### 3-2-2. 經由地

雲南省広西府 （雲南省紅河哈尼族彝族自治州瀘西県）

同 師宗州（同 曲靖地級市師宗県）

同 曲靖府羅平州（同 羅平県）

貴州省安順府普安州（貴州省黔西南布依族苗族自治州興義県）

雲南省曲靖府亦佐県（雲南省曲靖地級市富源県）

### 3-2-3. 探訪先

広西府瀘西県瀘源洞（8月10日条で概説、11日探索）

曲靖府羅平州城周辺（8月22日探索）

### 3-2-4. まとまった地理記述

広西府周辺：広西の地理あらまし、発果山の諸峯、新寺（万寿寺）、瀘源洞（8月10日条）

羅平州周辺：羅平の地名変遷、羅平州の地理あらまし、白蠟山、束龍山、羅莊山（8月18日条）

黄草壩（興義）周辺：黄草壩の地理のあらまし、黄草壩周辺の水系・交通路・異民族・險要の地・山の石質（8月28日条）



## 4. 第3部 埼玉大学図書館蔵「徐霞客」関連文献目録（稿）（1）

### 4-1. はじめに

徐霞客関連の書籍を収集し、埼玉大学図書館の所蔵としている。その目録と簡単な解説を施す。各章内では、「中国語文献」「日本語文献」「その他の言語文献」の順で記す。

### 4-2. 清代

「徐霞客遊記」の初の刊本は、乾隆41（1776）年刊の徐鎮初刻本である。それ以前の抄本のうち、影印されているもの二点と、清朝の刊本の影印版一点を取り上げる。

#### （清代）1

NCID	BB14377540
書名	徐霞客遊記
編著者	徐弘祖著
出版事項	南京：鳳凰出版傳媒集團 鳳凰出版社、2011.12
形態	1冊、精装
シリーズ等	無錫文庫
言語	中国語（漢文）
ISBN	9787550603073
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z
解説	<p>「徐霞客遊記」の抄本。清代の抄本の影印。</p> <p>抄本は遊記の全文に、錢謙益の「霞客徐公伝」や楊名時の序文などが附載されている。康熙年間（1662～1722）の書写と推測される、奚又溥（不詳）写本に近いものと考えられ<sup>(5)</sup>、乾隆刊本以前の遊記の姿を示すものと考えられる。書き込みに、「改亭淪子」なる人物が乾隆48年（1783）に購入したとある。また別の書き込み（題記）によれば、葉景葵（1874～1949）が、民国24年（1935）と29年（1940）にこの抄本を校閲したという。現在は、上海図書館の所蔵だが、「無錫文庫」にリプリント版として収録。</p> <p>「無錫文庫」は、無錫に関わる古典籍をリプリントしたもので、2011年に鳳凰出版社から刊行された。第四輯《無錫文存》の一部として、徐霞客遊記が採録されており、この抄本を採用している。</p> <p>一丁を開いて、A4版に上下で印刷。</p>

#### （清代）2

NCID	BN1283247X
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖撰
出版事項	上海：上海古籍出版社、1993.12
形態	1冊のうち、精装

シリーズ等	山川風情叢書：四庫全書
ISBN	7532515923
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Ty
解説	<p>「徐霞客遊記」の抄本。四庫全書収録の抄本の影印。</p> <p>四庫全書の完成は、乾隆47年(1782)7月。「四庫全書総目提要」によれば、史部十一地理類九遊記之属のひとつに「徐霞客遊記」が収録。「両江総督採進本」とあり、楊名時抄本をもとにしているという。楊名時の序を附載。</p> <p>「山川風情叢書」は、山水、古蹟、帝京と中外遊記の類の古代地理学著作の、稀見抄本や早期刊本をリプリントしたもの。「徐霞客遊記」は文淵閣四庫全書本によっている。(宋)張礼撰「游城南記」を頭として6種の文章を収録する1冊に収録(3番目)。</p> <p>一丁を開いて、B6版に上下2枚印刷。</p>

(清代) 3

NCID	BA58698566
書名	徐霞客遊記
編著者	徐霞客撰
出版事項	鄭州：河南教育出版社、1995.10
形態	1冊のうち、精装
シリーズ等	中国科学技術典籍通彙
言語	中国語(漢文)
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	402.2:N:3
解説	<p>「徐霞客遊記」の刊本。嘉慶13年(1808)、葉廷甲刊本(葉廷甲本)の影印。</p> <p>刊本は、葉自序によれば、嘉慶11年(1806、乾隆本刊行の31年後)、徐鎮が以前刊行した徐霞客遊記の版本を、葉廷甲に寄贈した。そこで彼は、楊名時抄本と陳泓鈔本ともあわせて校勘し、新たなテキストを作成し、嘉慶13年4月に刊行した、という。乾隆本の版本を利用したため、大幅な改定ではなく、文字の入れ替えや附録部分の改変などの部分的な改修である。初の刊本である「乾隆刊本」の姿をかなり伝えるものと言える。</p> <p>「中國科學技術典籍通彙」は、任繼愈主編の、数学・技術・天文学等の科学技術に関する伝統中国における典籍を集めてリプリントしたもの。「地学巻」は、唐錫仁主編で五冊に59点の文献と地図を収録する。第三冊に葉廷甲本「徐霞客遊記」が影印されている。</p> <p>一丁を開いて、B5版に上下2枚を印刷。</p>

#### 4-3. 1920年代

1920年代には、活字刊本が何本も出版される。特に、丁文江による校訂されたテキストが登場し、

「遊記」に対する研究の基礎が築かれた。日本では、文章家の遅塚麗水がエッセイなどで徐霞客を取り上げている。

(1920代) 1

NCID	BA80189240
書名	徐霞客遊記大観
編著者	徐宏祖著
出版事項	上海：掃葉山房、1924
形態	12冊、2 帙、線装
シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z:1～12
解説	「徐霞客遊記」の刊本。石印本（石版に文字を彫って印刷）。封面裏に「民國十三年影印」とあるが、(清代) 3「葉廷甲本」を踏襲しているので「影印」としているのであり、「リプリント版」ではない。本文、序文等の附録とも、(清代) 3と同じ内容の文章だが、大幅に組み替えたり、字体を変えたりしている。

(1920代) 2

NCID	—
書名	〔新式標點〕徐霞客遊記
編著者	徐宏祖撰、沈松泉点校
出版事項	上海：羣衆圖書公司、1924
形態	4 冊、平装
シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	
解説	<p>「徐霞客遊記」の刊本。初版は、1924年で、丁文江本に先行する。西洋式の洋装活字本としては、初めてのもの。</p> <p>「清代 (3)」のもとで「葉廷甲本」を底本に、沈松泉が校訂を行い、句読点や固有名詞記号等を加えたもの。序文や雑文は、底本をほぼ踏襲。さらに、梁啓超「梁任公先生代序」・曹聚仁「『徐霞客傳』作者攷証」・「沈松泉新序」（いずれも口語体）が加えられている。梁啓超の序文を取録するのは本書のみ。</p> <p>後述する(1920代) 5の遅塚麗水と(1930代) 4の小杉放庵は、いずれも本書を入手して読んだという。</p>

## (1920代) 3

NCID	BA80520333
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖撰、丁文江編
出版事項	臺北：鼎文書局、1972.9
形態	2冊、精裝
シリーズ等	國學名著珍本彙刊 地理學彙刊／楊家駱主編
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z:1～2
解説	<p>「徐霞客遊記」の刊本。本テキストはリプリント版だが、元になった商務印書館本の初版が1928年なので、ここに置いた。</p> <p>丁文江（1887～1936）が詳細に校訂し、句読点と固有名詩を表す傍線を施したもので、1980年に上海新整理本が出るまでは、徐霞客遊記の最も優れたテキストであった。徐霞客の詳細な年譜と34枚の彩色地図が添えられており、研究の便がはかられている。</p> <p>初版本のデータを補足する。[NCID：BA48709054。上海商務印書館、1928年。附図は別冊で、全3冊]</p>

## (1920代) 4

NCID	BB16354568
書名	徐霞客遊記
編著者	徐霞客著、劉虎如選註
出版事項	[上海]：商務印書館、1929.6
形態	1冊、平装
シリーズ等	學生國學叢書、新中學文庫
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z
解説	<p>「徐霞客遊記」注本。初めての注釈つきの注本。所蔵本は、第3版[1947.3]。名山遊記18篇と「盤江考」「江源考」を選び、句読点や固有名詞記号を施した上で、簡単な注をつけたもの。</p>

## (1920代) 5

NCID	BN0945246X
書名	新入蜀記
編著者	遲塚麗水著

出版事項	東京：大阪屋號書店、1926.12
形態	1冊、精装、箱入り
シリーズ等	—
言語	日本語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Ti
解説	<p>遅塚 麗水（1867～1942年）は、明治・大正期の作家、新聞記者。本名は金太郎。紀行文の大家として知られている。</p> <p>本書は、1925年3月に上海を出発し、長江を遡行して四川の成都に至る、100日あまりの旅日記。帰途を記した最終章「矢の如き歸心を載せて」に「徐霞客の故郷」「青天碧海」と題する二文があり、徐霞客の故郷である江陰を通り過ぎた折りに、徐霞客の事績を簡単に紹介している。</p> <p>遅塚には、別に「支那の大旅行家 徐霞客—古今旅行家列伝（16）」という一文があり（雑誌『旅』第11巻第1号〔118号〕新潮社、1934.1）、上海で、（1920年代）2「沈松泉点校本」を入手したとする。</p>

#### 4-4. 1930年代

1930年代は、国学基本叢書本が出版された。（1930）3「丁文江本」を組み替えたものだが、多くのリプリント版を生み、「上海新整理本」が出る前は、このテキストが基本とされた。他に線装本の流れを汲んだ洋装刊本も何種類も出されたが、やがて国学基本叢書本に駆逐されていった。日本では、画家の小杉放庵がエッセイの中で徐霞客を取り上げている。

（1930代）1

NCID	BA55079320
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	臺北：臺灣商務印書館、1968.12
形態	1冊
シリーズ等	國學基本叢書四百種
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	図書館（書庫）
請求記号	082.1:Ko54.7:1-350
解説	<p>「徐霞客遊記」の刊本。本書はリプリント版だが、元になった商務印書館本の初版が1933年なので、ここに置いた。（1920代）3「丁文江本」の再版だが、組み替えている。地図は略されている。本書は一冊だが、「國學基本叢書簡編」では三分冊、次にあげる「万有文庫」では六分冊。</p> <p>初版本のデータを補足する。〔上海商務印書館、1933年〕</p>

## (1930代) 2

NCID	BB14349487
書名	〔新式標點〕徐霞客遊記
編著者	徐霞客著、鮑賡生標點、何銘校閱
出版事項	上海：新文化書社、1936.3（再版）
形態	4冊、平装
シリーズ等	名著遊記読本
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z:1～4
解説	「徐霞客遊記」の刊本。初版が1933年なので、ここに置いた。線装本の流れを汲んだ（1930代）2「沈松泉点校本」に倣った洋装刊本のひとつ。しかし、書名は同じだが、梁啓超の序文はなく、清代の線装本に戻っている。各巻の巻頭に「江陰徐宏祖霞客著 莫釐樵子標點」とあるが、莫釐樵子標點本として、「新文化書社、1932年」本がある。本書とこの本との関係はあきらかではないが、おそらく同じ「版」ではないか。

## (1930代) 3

NCID	BB23383861
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	臺北：臺灣商務印書館、1965.11
形態	6冊、平装
シリーズ等	萬有文庫薈要
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2:Z:1～6
解説	「徐霞客遊記」の刊本。本書はリプリント版だが、「萬有文庫」本が1934年の刊行なので、ここにおいた。（1930代）1「國學基本叢書本」のリプリント。「萬有文庫」は、王雲五らが、伝統文化を伝える文献を廉価で提供しようとしたもので、「萬有文庫薈要」は、その中から厳選したものを台湾でリプリントしたもの。

\*参考（薄井私有）

## (1930代)

NCID	—
書名	〔新式標點〕徐霞客遊記
編著者	徐宏祖撰、沈芝楠標點、胡協寅校閱



出版事項	上海：大達圖書供應社、1935.4
形態	2冊、平装
シリーズ等	遊記叢書
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	—
解説	「徐霞客遊記」の刊本。組み替えてはあるが、内容は、標点も含め、(1930代) 2刊本に酷似する。この時期同種の平装本が何種類が刊行されている。

#### (1930代) 4

NCID	BA44680187
書名	工房小閑
編著者	小杉放庵著
出版事項	東京：竹村書房、1934
形態	1冊、精装、箱入り
シリーズ等	—
言語	日本語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	914.6:Ko
解説	<p>小杉放庵（1881年～1964年）は、明治・大正・昭和時代の洋画家。本名は国太郎。</p> <p>本書は、1934年刊行のエッセイ集。中に「桂月と徐霞客」と題する一文がある。ここにいう「桂月」とは、おそらく大町桂月だろう。大町（1869～1925年）は、近代日本の詩人、歌人、随筆家、評論家。本名は芳衛。和漢混在の独特な美文の紀行文は広く読まれた。青森県の十和田湖と奥入瀬ことに愛し、晩年は同地の蔦温泉に居住し、この地で死去した。</p> <p>桂月翁の山登り好きを紹介しつつ、同様の「山水病」「烟霞癖」を持ったものとして徐霞客を紹介。梁啓超のコメントを引用しているところから、(1920) 2「沈松泉点校本」を入手して読んでいるのであろう。「紀行の文章は、支那流の摘出簡化にあらず、逐一に方角を見里程を認め、山脈の分派、水流の方向を説いて精細を盡す」「文章としては名文とは思へず」などと記している。</p> <p>なおこの一文は、『東邦美術』2巻1号（1938）にも収録されているようである。</p>

#### 4-5. 1940年代

日中戦争と国共内戦の時代で、研究や出版は全体的に低調であった。その中で、初めて徐霞客に特化した研究会が開催され、論文集として刊行されたことは、特筆に値する。日本では、武田

泰淳が徐霞客を主人公とする小説の草稿を書いたらしい。

(1940代) 1

NCID	
書名	徐霞客先生逝世三百周年紀念刊
編著者	國立浙江大學編
出版事項	[上海]: 上海書店、1989.10
形態	1 冊、精裝
シリーズ等	民国叢書第 1 編89歴史地理類
言語	中国語
ISBN	7805691797
配架場所	教育国語
請求記号	
解説	<p>徐霞客をテーマにした最初の論文集。本書はそのリプリント版だが、最初に刊行された年代として、ここに置いた。</p> <p>浙江大学史地系は、1941年12月に、貴州の遵義において「徐霞客逝世300周年紀念会」を開催した。そこでの発表原稿をまとめて、1942年に刊行されたのが、本書。</p> <p>張其昀「序言」以下、下記の12篇の論文を掲載。竺可楨「徐霞客之時代」、葉良輔「丁文江與徐霞客」、方豪「徐霞客與西洋教士關係之初步研究」、林文英「江流索隱」、任美鏐「『江流索隱』質疑」、任美鏐「讀徐霞客遊記憶浙東山水」、黃秉維「霞客遊記中之植物地理資料」、譚其驤「論丁文江所謂徐霞客地理上之重要發見」、方樹梅「大錯遺文霞客自滇歸年之貢獻」、王維屏「徐霞客之故郷」、方豪「徐霞客先生年譜訂誤」。</p> <p>オリジナルは、浙江大学の自費出版物。手書きのガリ版刷りか？</p> <p>さらに名を変えて、活字版としたのが、(1940代) 2。</p> <p>「民国叢書」第 1 編89は、他に「中国地理大綱」「中国地勢変遷小史」「建設地理新論」を収録。</p>

(1940代) 2

NCID	BA57906045
書名	地理学家徐霞客
編著者	竺可楨等著；國立浙江大學史地研究所編輯
出版事項	[上海]: 商務印書館、1948.2
形態	1 冊、平装
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	289.2:Z
解説	徐霞客をテーマにした最初の論文集。(1940) 2を活字版で刊行したもの。

\*参考：薄井私有  
(1940代)

NCID	—
書名	雑誌「海」：未発表作品 霞客
編著者	武田泰淳
出版事項	[東京]：中央公論社、1979.7
形態	—
シリーズ等	—
言語	日本語
ISBN	—
配架場所	—
請求記号	—
解説	<p>武田泰淳の未発表小説作品。雑誌「海」1979.7号に掲載されたもの。約20頁の小篇。全集第十八所収。</p> <p>同誌収録の、小野忍「解説」、武田百合子「『霞客』発表にあたって」によれば、1939年10月、27歳で除隊して中国から帰国し、翌1940年に3篇の小説を書いたころの作品ではないかという。</p> <p>徐霞客の雲南における旅遊を描いたものだが、「遊記」に記されている自然描写はほとんどなく、雲南で会った人々について「断片的な記事から想像をめぐらして、明末という不安の時代の空気、そのなかで独特の生き方をした徐霞客の人間像を鮮やかに浮かび上がらせている」(小野)。</p>

#### 注

- (1) 季会明によれば、この巻は知人が借りだした直後に清兵の江陰乱入があり、紛失してしまったという。
- (2) いわゆる外邦図。今回参照したのは「貴陽」「雲南」「臨安」。
- (3) 地方政府発行の地方志。今回参照したのは以下のもの。
  - 『建水縣志』建水縣志編纂委員會編、中華書局、1994.5
  - 『瀘西県志』雲南省瀘西県志編纂委員会編纂、雲南人民出版社、1992.12
  - 『師宗県志』師宗県地方志編纂委員会編、雲南大学出版社、1997.7
  - 『羅平県志』羅平県地方志編纂委員会編纂、雲南人民出版社、1995.12
  - 『黔西南布依族苗族自治州志』貴州省黔西南自治州史志徵集編纂委員会編、貴州民族出版社、1987.4
  - 『興義県志』貴州省興義県史志編纂委員会編、貴州人民出版社、1988.9
  - 『富源県志』中共富源県委史志工作委员会編、上海古籍出版社、1993.11
- (4) 前掲注(1)。
- (5) 「徐霞客遊記」の抄本と刊本については、拙稿「徐霞客遊記のテキストについて」『埼玉大学紀要(教育学部)』第66巻第2号、2017年参照。

(2018年10月24日提出)

(2018年11月16日受理)